

## 優しさのピース

中 三

お年寄りの介護をする、この一つの仕事がどれほど大変で、勇気の灯をともすことがどれほど重要なことなのか、本当の意味で理解している人はほんの一握りしかないだろう。介護という言葉 を聞くと、誰もが「すごいね。」や「大変でしょう。何か困ったことがあったら手伝うよ。」という言葉 をかける。確かにその通りだし、励ましの言葉をかけることは悪いことではない。むしろ良いことだ。しかし実際はどうだろうか。本当に手伝えるのか。手伝うことの大変さを理解しているのか。手伝ってみて常に笑顔で接することは誰にでもできそうで、ほとんどの人ができない、と私は思う。こう考えるようになったのも私の祖父母がきっかけだった。

私には母方と父方の祖父母がいる。全員もう七十五歳を超えているが、近年までは驚くほど元気だった。大きな病氣も抱えていないし、車イスに

も無縁だ。それどころか自転車に乗って近くの図書館まで、本を借りに行ってくれたり、習い事の送迎をしてくれたりと、両親のように私たち姉弟を支えてくれた。私たち家族は、というとそれぞれが自分のことに精一杯で特に私は、祖父母にお礼を言ったことすらほとんどなかった。今になって分かるが、私は相当失礼な言葉を発していたと思う。しかし、それが自分の意識の中で当然となっていた。恐ろしさに自分自身気がつかなかった。そんな生活が、天と地が引つ繰り返ったように一変したのは今年の秋だった。

以前から、母方の祖父母は少し耳が遠くなっているな、と感じていた。会話をしても、「えっ」や「もう一回言つて。」という台詞が増えていたからだ。あえて何も言わなかったが、そろそろ年なのか、ということとは分かっていた。それが今年の秋になって特にひどくなったのだ。その上、祖父は認知症をも発症してしまった。祖父が患ったのは、アルツハイマー型認知症という最もかかる割合の大きい認知症だった。幸い症状はさほど重いわけではなく、歩行障害までは至っていない。し

かし記憶力の減退、視空間失認は介護に詳しくない私でも分かる。実際「散歩に行く。」と夕方に家を出たきり、真夜中になっても帰って来ず、結局警察に保護された。また、ショッピンゲセンターと一緒にいったときも、弟妹が祖父の手を引っ張ってくる

「あれえ？何だか知らない小学生に手を繋がれて来た気がするなあ。」

と言っていた。そんな状況下であったのに、本気で動いたのは娘である母だけだった。私はというと、祖父の症状、母の苦労は分かっていた……いや、そのつもりだった。でも何一つ知ろうとしていなかったし、動かなかった。今まで通り、自分という殻の中だけで生活していた。手伝うことの大変さを理解し、笑顔で接することが出来る人はほとんどいない。そう記したが、私もその一人だ。介護は必要なこと、誰かがやらなければいけないこと、頭ではそう分かっているつもりなのに行動はストップする。どうすれば良いか分からない、疲れる、耐えられない……。もちろん本気で介護と向き合って、心から楽しく思う人もいる。しか

し、決して肯定しているのではないが辛い現実から目を背け、逃げたくなるのが本来の心情だ。そう考えて介護を敬遠してしまう人は、私だけではないはずだ。

つい先日、祖父が

「こんなのは観るな。」

と言って、家族で観ていたバラエティー番組を消そうとした。私はついムツとした表情で、何か言つてよ、と母を見た。すると母は、

「大丈夫だよ、おじいちゃん。安心してね。」

と優しく声をかけた。その晩私は母にこう聞かれた。

「おじいちゃんのこと、どう思ってる？」

唐突な質問にとまどいながらも私は、

「別に。迷惑とまでは思っていないけど、認知症と分かっているだけでもムツとするんだよ。」

と答えた。すると母は、目に涙をためながら

「あなたも小さい頃、お世話になったよね。今こそ手伝ってあげようよ。おじいちゃんだって、また来たか、みたいな空気の中で過ごすのは辛いし、苦しいんだよ。」

と言った。私は何も言えなかった。介護をするほうもされるほうも辛い。その中で人生に幕を下ろすことがどんなに苦しいか。どんなに寂しいか。私はそれをこれっぽっちも理解していなかった。

それから私はまだ、お茶をいれることや少し話しかけることしかできていない。介護というには程遠いだろう。しかし、その勇気のピースは無駄にはならない。絶対に。ちりも積もれば山となるということわざがあるように、小さな勇気と優しさのピースはいつかきつと大きなパズルとして完成する。それこそが、本当の意味での介護であり、お年寄りの方に対して私たちができる、最大の敬意だ、と私は思う。

